

# 山と博物館

第44巻 第2号 1999年2月25日

大町山岳博物館

## 開催にあたって

松本 恵美子

女性の身近な手芸から始まったパッチワークキルトも、現在では全世界共通のアート・工芸として注目されて参りました。当教室（キルト糸車）は一九八五年、ここ大町教室から始まり、第一回作品展を大町文化会館でさせて頂きました。現在、長野三教室・上田・白馬村にて教室を開講させて頂いております。会員数八五名、過去、県民文化会館・上田西武デパートetc.七回の作品展を開催。毎回二〇〇点の作品をご高覧頂いております。ようやく会員の中からも国内・国外のコンクールにも入選・入賞者がいるようになりました。より一層作品への意欲も増して参りました。そのような中、教室開講一周年にして市立大町山岳博物館のご厚意を賜り、私ども

の作品を企画展として開催して頂ける運びとなりました。小さく裁いた布を一針・一針とつぎ合せて作り上げて行く地味な手作業、根気のいる手仕事が思わぬ模様を醸し出す、そして絵画にもなつて行く、このキルトの世界。

大町市は私の出身地ですが、この地を離れて早三〇年余り、当地で作品展を開催して頂けるという喜び、今回大町市のシンボルであります、ライチヨウ・カモシカ・オオヤマザクラ・カタクリの花を入れた作品『七八名の山のいぶき』（たて二七五cm・よこ一七五cm）を中心に、自然をテーマにした作品八〇点をご覧頂く方々ぞれぞれが思い思いに感じて頂ければ幸いです。

（キルト糸車主宰、長野市在住）



『78名の山のいぶき』

企画展「キルト糸車 パッチワークキルト展」

— 岳光る 風のささやき 布遊び —

3／20(土)～4／4(日)

## 「ライチョウを語る会」基調講演【その二】

期日 平成一〇年八月二九日

会場 大町建設労働者研修センター

主催 大町山岳博物館ライチョウを語る会実行委員会

大町山岳博物館編

### 『ライチョウの生活』

中村 浩志

#### 1、はじめに

私がライチョウの研究を始めたのは今から二〇年ほど前のことです。信州大学を卒業した後、京大の大学院へ行きました。信州大学へ戻ってきたときに、羽田健二先生が最後の研究として、日本のどこの山にどのくらいのライチョウがいるかを調べたいというお話をしました。北アルプスはほぼ半分終わっている。だから、残りの北アルプスと南アルプスのライチョウについて調べてみるとなりました。以来、毎年学生たちと一緒に何回となく、ライチョウ調査にアルプスへ登りました。

今日お話しすることは、羽田先生が調べられたことに私が調べたことを加えて、日本のライチョウというのはどういう鳥なんだろうということを、お話ししたいと思います。

#### 2、ライチョウとは

ライチョウとはどんな鳥かという点ですが、日本では本州中部の高山にのみ生息する鳥です。一九五五年に国の特別天然記念物に指定されています。ライチョウの特徴を一言で言つたら、「寒い気候に適応した鳥」だということです。ライチョウは、足の指先まで毛で覆われて



「ライチョウを語る会」  
(H.10.8.29 大町建設労働者研修センター)

現しているということです。

#### 3、ライチョウの分類と分布

次にライチョウはどんな分類学的な位置にあるのかというお話をしたいと思います。皆さん良くご存知のように、似たような「種」を集めて「属」というグループにまとめ、さらに似た「属」を集めて「科」にまとめ、似た「科」を集めて「目」というように生物を分類するわけです。

その分類によるとライチョウという鳥は、キジ目のグループです。キジ目の中できらにライチョウ科、

ライチョウ属の

ライチョウです。

世界にはキジ目の鳥は六科七十五属、二六三種生息しています。そして、翌朝のねぐらの穴にこ寝るのです。そして、翌朝のねぐらの穴にこ

のようになります。このようにライチョウの一番大きな特徴というのは「寒い気候に

適応した」という点にあります。

ライチョウの住む場所は皆さんご存知のよ

うに高山です。標高三、〇〇〇mを越えた地

域に行きますと、もう木は育ちません。そ

う環境でライチョウは生活しています。高

山帯という環境がいかに厳しい環境であるか

ということは、この写真が如実に物語ってい

ます。これは北アルプスでライチョウ調査で

登った折に尾根筋で見つけたカラマツです。

カラマツの葉は皆さん良くご存知のよう

に、平地であつたら真っ直ぐ伸びて二〇cm位

に生長する木なのです。しかし、高山帯に芽

生えたカラマツは、強い風、それから寒さに

よつて真っ直ぐ伸びません。そして、何

百年かけてここまでようやく地面をはうよ

うに生長してきたというわけです。こういう

姿を見ると、動物を研究している私たちも非

常に感激します。植物はまさに体で生活を表

サギの足」という意味です。日本のライチョウは日本語で「ニホンライチョウ」といいま

すが、ラテン語では「*Lagopus mutus*」で、全部で二八亜種に分かれます。

ライチョウ科の一九種は、北半球の温帶から亞寒帶、寒帯にかけて分布します。その中でもライチョウは最も北に分布し、アラスカ

から北アメリカ大陸の北部、それからヨーロッパの北部、ソ連邦の北部にかけて分布しています。

日本では本州中部の高山帯に限つて分布し、日本では本州中部の高山帯に限つて分布しています。

#### 4. ニホンライチョウの特徴とその生活

ここでニホンライチョウの特徴について、いくつか挙げたいと思います。まず、今言いましたように、「世界のライチョウの最南端に分布する」ということです。

氷河時代は気候が今より寒く、氷河がもつと南の方にあり、その後、氷河がだんだん北へ退いたときに、高山に取り残されたのが日本とかヨーロッパアルプス、あるいはビレネー山脈に隔離分布されているライチョウなのです。

そのためニホンライチョウというのは高山に取り残された「氷河期遺留動物」、あるいは「遺存動物」という言い方をされています。

それから、「人を恐れない」という特徴です。ライチョウの写真を撮るときに、少しずつゆっくりゆっくり近づけば一㍍の距離まで近づくことができます。日本のライチョウの非常に大きな特徴は、後で述べますが人を全く恐れないということです。日本の中でもこのような鳥はライチョウ以外にいません。

高山で日本のライチョウ、ニホンライチョウはどんな生活をしているのかということを簡単にお話ししたいと思います。冬、高山は雪で覆われます。この時季、ライチョウたちは高山から少し下がった亜高山帯まで一部は下り、群れで生活しています。そして、雪解けが高山から始まるとき、次第に群れが亜高山帯から高山の方へ移動して行きます。その頃になると、群れの中の雄同士の争い行動が活発になります。雄同士が争って、一般的にいうと、雪解けの早い高山の高いところから低い所へと順番に縄張りを確立していくといわれています。そして、縄張りを雄が確立した後、つがいができるとこの写真のように、雄が雌に絶えず付き添って行動します。そのうちに、雌が背の低いハイマツの下に巣を作つて卵を産みます。卵はだいたい五卵から七卵位

産みます。そして、この卵を温めるのは雌だけです。そして、雌は朝と夕方の二回だけ餌を探るために巣から離れます。そのときは、

雌が雄が護衛します。雌が抱卵している間、雄はもっぱら縄張りの護衛にあたっています。

しかし、雄が孵化しますと雄はその縄張りを解消して、子どもと雌を置いて群れ生活に入るとされています。孵化した雛が雌親と

#### ウの一 年 間 の 生 活 で す。

#### 5. 一夫多妻のライチョウ

ライチョウというは「一夫一妻の鳥」というように言われていました。しかし、南アルプスの塩見岳を調査しているとき、偶然の機会に一夫多妻のライチョウを発見することができますので少しお話したいと思います。

調査中の夕方、雌が巣から飛び出したすぐ後を雄が追つてゆき、雌が三〇分ぐら

い餌を食べてから巣に戻るのを確認しました。その後、もう一羽の雌が飛び出してもとの見張り場所へ戻るのを観察しました。

二つの巣は近い距離で、雌が巣へ戻ると護衛し、雌が巣へ戻るともとの見張り場所へ戻るのを観察しました。

その雌の後を同じ雄がずっと護衛し、雌が巣へ戻るともとの見張り場所へ戻るのを観察しました。

二つの巣は近い距離で、一〇〇mもありません。そ

の距離で二つの巣があるといふことは少しおかしいと

いうことで、学生たちに詳しく調べてもらいました。

ライチョウの鳴声をテープレコーダーで鳴らすと、それを聞きつけた雄はすぐ跳躍できます。少し離れたところで同じことをやると、また跳んできて反応する。

しかし、全く攻撃に来なくなる場所があります。そこ

が縄張りの境界です。といふことは、明らかにひとつある雄の縄張りの中にはたつの巣があり、どちらの雌とも雄は関係を持っているということです。間違いなく

します。秋になると山一体のライチョウが集まり、秋から冬はまた群れ生活に戻るとい

う生活をしています。これが大雑把なライチョウ

では、ライチョウは一体どのようなのを食べて生活しているんだということを話したいと思います。

冬の時季は高山帯から下の亜高山帯の針葉樹林まで下りてきて、ダケカンバとかのいろいろな植物の冬芽を雪を拂り起こし、場合によつては針葉樹の葉まで食べて生活しています。そして、雪解けとともに高山で雪が解けてなくなつた場所を中心爪で雪、氷をかいだ高山植物を掘り出して食べています。

雪解けの終わった六月の山、ちょうどキバナシヤクナゲが花をつけています。ライチョウはそのキバナシヤクナゲの花を食べます。この時期、こういった環境でさまざまな植物が芽吹いています。そこで、葉っぱが出たら葉っぱを、花をつけたら花を、実をつけたらそれを、種をつけたら種を、四季を通して高山帯に見られるさまざまな高山植物を食べて生活しています。ですから、ライチョウは基本的に草食性です。そして、時たまミミズとか昆虫も食べます。

ライチョウの好物はクロマメノキです。それからチングルム・オヤマノエンドウは、葉も花も種も食べます。さらにチョウノスケソウ、タカネマンテマ、ミヤママンネングサ、ミヤママラサキ、トウヤクリンドウ、チシマリンドウ、タカネシオガマなどです。こういった高山植物を食べて生活しています。

日本の高山というのはヨーロッパの高山に比べて非常にきれいな花が見られるという特徴があります。

#### 7. ライチョウの縄張り数

羽田健三先生を中心とした調査をしたのかといいますと、先ほど言いましたように、日本のどの山にライチョウが何匹いるかということを調査したわけです。一夫多妻であるといふことが分かりました。

山小屋が開いていない時期から学生を四、五人連れて登つて、だいたい一週間かけて調査します。残雪が多く残っていて、非常に危



ライチョウについて具体的な調査の話などをまじえて講演する講師

険なハードな調査になります。登山道を歩いているだけでは調査になりません。登山道があろうとなかろうと、ライチョウが棲むハイマツ帯より上の高山帯をくまなく歩き、上つたり下りたりして、どこに何羽のライチョウがいるかという調査をしました。

白馬連ヶ岳天狗の頭にかけての縄張り分布です。北アルプスでは白馬周辺に非常に多いです。南アルプスでは北岳、農鳥岳、間ノ岳、いわゆる白峰三山に多くのライチョウが生息することが分かりました。

それから金峰山。ここに一九六七年に南アルプスの北岳からライチョウの雌二羽、雄一羽、計五羽を放しました。ここも一〇年後には絶滅したのです。

ましたようすに、調査を一五年かけて行ないました。だから、はじめにやつてある頃の山はもう減つてゐるかもしだいし、逆に増えてゐるかもしだいです。この調査は今から一五年前の結果です。今どうなつてゐるかは分かりません。それから先ほど言つたように、爺ヶ岳の調査から雄三羽のうち一羽があぶれでいると推定しました。しかし、ほかの山岳でもそうだとは限りません。一夫多妻のライチョウもいます。しかし、この三、〇〇〇羽というのはそんなに現実とかけ離れていないない数だらうと考へています。

ライチヨウは繁殖期になると繩張りを持ちます。その繩張りを数えることによって生息数を明らかにしようという調査です。しかし全部の地域を繁殖期に調べ回るのは労力的に無理だから一部は繁殖が終わった夏の時季に環境から繩張りを推定する方法を取りました。繁殖期の調査では、岩の上で繩張りの見張りをしている雄など、できるだけ多くのライチヨウを見つけます。ライチヨウの糞、羽根がいると、そこにライチヨウが生息する証拠になります。

番南は南アルプス光岳のすぐ近くのイザル岳が分布の南限です。そして、分布の中心は、朝日岳から穗高岳にかけての北アルプス。計七八四繩張りあるのが分かりました。

それから、その周辺の乗鞍岳に四八、御岳山には五〇、火打山、焼山には一〇、南アルプスの甲斐駒ヶ岳から光岳では、二八九の繩張りがあると推定されました。

それからライチョウはキジとかニワトリの仲間ですから、砂浴びが大好きです。砂浴びをした後に必ず羽根が落ちています。こういうライチョウの生活痕跡ができるだけ見つけたて、それを地図上にプロットしていきます。

それをもとに、それぞれの山に何個のライ子ヨウの縄張りがあるのか調べていきます。

れました。巣は、つだけ見つけました。抱卵糞は全部の繩張りで見つけました。争い行動とか、生活痕跡を根拠にして、塩見岳にこれだけの繩張りがあるということを推定したのです。

こうした調査をいろいろな山で繰り返し行ないました。北アルプスの白馬、杓子岳から

それから移植の試みが二例あります。富士山への移植。これは一九六〇年に北アルプスの白馬岳より、雌一羽、雄一羽、幼鳥四羽、計六羽を持って行つて富士山に放したわけです。その後、一時的に増加しましたが、一〇年後には絶滅してしまいました。

息数は約二、〇〇〇羽（一  
一八一×二・五）二九五  
三）と推定できます。  
しかし、これはあくまで  
も推定数です。先ほど話



スライドをまじえた講演を熱心に聞く参加者

## 10、海外のライチョウ

今から五年前に、アリューシャン列島へ登山学術調査に行く機会がありました。ご存知のように、アラスカ半島から円を描くように、火山によって島がつながったものがアリューシャン列島です。ここに夏、調査に行きました。この地域にはライチョウが生息しているということから、その調査に参加しました。

このアリューシャン列島のライチョウを見てびっくりしたことがあります。日本ではライチョウが人の姿を見ると飛んで逃げるといふことは全くありません。それが向こうのライチョウは人の姿を見ると飛んで逃げるといふことは全くありません。日本ではライチョウは飛ばない鳥で逃げる。日本人はライチョウは飛ばない鳥だと思いがちですが、日本のライチョウでもいざつていうときには飛びます。繁殖期にあれば雄が進入したときなんかは、一〇分くらい追い回して飛びます。そういうことは知つていましたが、人の姿を見て逃げるライチョウにはびっくりしました。日本だと、ライチョウの写真を撮るときに望遠レンズはりません。ゆつくりと十分標準レンズで撮れるわけです。しかし、向こうのライチョウは持つていつた一、〇〇〇mmの望遠レンズを使ってようやく写真を撮ることができました。全く人に対する警戒心が違うわけです。こういうことを知つて、日本のライチョウというのは極めて特殊なライチョウであることに気が付きました。日本以外の多くの地域では、人間によつて狩猟されたという長い歴史があります。地域によつては現在でも狩猟の対象になつています。

しかし、日本では高い山にいるライチョウというのは信仰の対象として崇められてきて、捕獲は行われてこなかつたのです。だから、日本のライチョウは人をおそれないのでアリューシャン列島に行って、手付かずの自然というのはこんなに素晴らしいのかといふことに感激しました。夏の季節にわざと雪が解けるといろんな植物が花をつけて、動物

が繁殖する。短い夏をいろんな動植物がいつせいに調査する華やかさを感じます。

## 11、日本の文化とライチョウ

日本の自然の景色というのは非常に美しい、世界に誇れるものだと思います。世界の多くの国がいわゆる牧畜民族です。その中で日本の大きな特徴というのは農耕民族です。日本の自然の本来の姿というのは、日本は一年中雨が多いので森の国です。その森の國の中を大小の河川が流れ、いたるところに湿地とか湖をつくつてはいたというものが日本の本来の姿です。縄文時代まではその自然を利用し、生活してきたわけです。それが弥生時代に大陸から稻作文化が伝わった結果、平地に水田を作りました。水田は大勢の力を合わせなければできませんから、水田の周りに集落を作ります。集落全体をまとめるために、神社を祭ります。そして、その周りの山、いわゆる里山は家を建てたり、薪炭林として大いに活用しました。しかし、奥山の森には手をつけませんでした。水を確保するために奥山に手をつけてはいけないということを経験的に知つて、その氷河を見学した後、近くのホテルへ戻つてびっくりしました。絵葉書を見たところ、今見た氷河の先端の位置が絵葉書のものとすく違ひ、ずれているのです。なぜかと聞いぶん違い、ずれているのです。なぜかと聞くと、氷河は年々後退してはいるということです。日本には今は氷河は残つていません。ですから、地球温暖化ということがあります。それで、氷河は年々後退してはいるのです。

今でも昔からのきれいな風景を各地で見ることができます。これは長野県の一番北の栄村です。千曲川があつて水田がある。里山があつてその奥に雪の山がある。これは戸隠山です。この地域では戸隠神社を祭つて、奥山を大事に守つてきたわけです。

日本のライチョウという人は人を怖れない。その理由は、日本の文化そのものの産物であることにアリューシャンのライチョウを見て気が付きました。

## 12、地球温暖化の影響

三年ほど前にイギリスへ一年間行く機会が

ありました。その間に、スコットランドにライチョウがいるということで調査に行きましたが、ついにライチョウを見ることはできませんでした。山の上まで羊を放していますから、高山といつても非常に貧弱です。ですからライチョウがいてもほんのわずかなのです。

それに比べたら日本のライチョウは非常に高密度に生息しています。五年前にはカナダへ行く機会がありました。その折にカナディアン・ロッキーを訪れました。これはカナディアン・ロッキーの中に位置するバンフという町です。日本でいづら上高地のようなところです。バンフとジャスパーのちょうど中間の場所に、高速道路からすぐ氷河の見られる場所があります。その氷河を見学した後、近くのホテルへ戻つてびっくりしました。絵葉書を見たところ、今見た氷河の先端の位置が絵葉書のものとすく違ひ、ずれているのです。なぜかと聞くと、氷河は年々後退してはいるということです。日本には今は氷河は残つていません。ですから、地球温暖化ということがあります。それで、氷河は年々後退してはいるのです。

今でも昔からのきれいな風景を各地で見ることができます。これは長野県の一番北の栄村です。千曲川があつて水田がある。里山があつてその奥に雪の山がある。これは戸隠山です。この地域では戸隠神社を祭つて、奥山を大事に守つてきたわけです。

## 題が出てきます。

三、〇〇〇羽という数は、現在増えているのか、減っているのか、不確かなことです。

先ほど富山の方から「ライチョウの数は安定している」というお話を安心しました。しかし、日本のライチョウというのはまさに風前ヨーロッパのアルプスの氷河では目に見える形で年々後退してはいるのです。

この事実を目前に見て、日本のライチョウのことを思いました。このまま地球温暖化が進めば、日本のライチョウはどうなるのかと非常に深刻に受けとめました。平均気温が一、二度上がつただけで、日本の高山帶の面積がずっと縮小されてしまうからです。

現在、日本に生息するライチョウの数は大体三、〇〇〇羽です。しかし、この三、〇〇〇羽という数は、はたして多いと考えてよいでしょうか、少ない数でしょうか。動物が安定した数を維持するには最低数一、〇〇〇個体必要と言われています。一、〇〇〇個体はないと健全な子孫を維持できなくなります。

## 13、ライチョウの将来

そういう観点からすると、南アルプスのライチョウは一、〇〇〇個体をすでに割っています。ですから、まず南アルプスのライチョウが心配です。

専門的な言葉で「ボトルネック効果」、「瓶の口効果」ということが言われています。瓶の中にはさまざまな色の違う玉が入れてあると考ります。黄色とか赤とか青とかです。その中から二、三個の玉を取り出します。それらの玉は赤であつたり、黒であつたり、特定の色の玉しか取り出せません。

ですから、数がたくさんいるときには、い

ろいろな特徴のある個体がいるから安心なのです。それが数が減つてくると、特定の遺伝子を持つた個体だけになります。そうなると、いわゆる近親交配の弊害など、さまざまな問題が出てきます。

三、〇〇〇羽という数は、現在増えているのか、減っているのか、不確かなことです。

先ほど富山の方から「ライチョウの数は安定している」というお話を安心しました。しかし、日本のライチョウというのはまさに風前

ヨーロッパのアルプスの氷河では目に見える形で年々後退してはいるのです。

この事実を目前に見て、日本のライチョウ

のことを思いました。このまま地球温暖化

が進めば、日本のライチョウはどうなるのか

と非常に深刻に受けとめました。平均気

温が一、二度上がつただけで、日本の高山帶

の面積がずっと縮小されてしまうからです。

そのためには、もっと現状把握が必要であ

り、もつといろいろな研究者が力を合わせ組

織化した研究を進め必要があります。それ

から、ライチョウの素晴らしさをもつと一般

の方々に知つていただきないと、あと五〇年

後、一〇〇年後にアルプスにライチョウが残

つているかどうか非常に心配です。

今回の会議を通じて多くの人の知恵と力を

結集して、ライチョウの将来を考えていきた

いと思います。

# 学社融合を考える ①

片山 寛

三年程前から「学社融合」という言葉が社会教育の場で急速に普及しました。博物館はもちろんのことです。以前から「学社連携」という言葉もあるため、学校と社会の協力関係を「学社連携・融合」ということが多くなりました。しかし、「連携」と「融合」に境界を引くことはできませんが、「学社融合」は明確な方向性をもつた手法であり、考え方です。それについてお話しする前に、学校教育の枠組みの変更にも大きくかかわってくる事例を見てみましょう。

九八年の秋に兵庫県で始まった「地域に学ぶトライや・ワイ・ク」が、大きな話題になりました。県内の公立中学校二年生約六万人が、地域社会で一週間にわたって体験学習をするという試みです。

先駆的な試みとしては、やはり兵庫県内の神戸市立長田中学校が九八年の三月に二年生の三日間の体験就職「スリーデイ・チャレンジ」を実施しています。

東京都武蔵野市の小中学校は「セカンドスクール」という宿泊体験学習を九五年から行っています。少年自然の家の利用やホームステイなどによって、小学校では六泊七日、中学校では四泊五日の「セカンドスクール」を行っています。

これらのうち、「セカンドスクール」については校長先生や受け入れ施設の職員の方の話を聞く機会がありましたが、△最初の三、

四日は家に帰りたがつたり不安定で、終わつてみると「よかつた」という感想をもつようだ。▽一泊二日では子どもが能動的に動き出す期間としては短い。指導者主導のプログラムにならざるを得ない。▽一泊二日の日程の中で学校は行事を詰め過ぎる。受け入れ側の社会教育の施設としてのアプローチも大事にしたい。▽人気ベストワンの時間は、探検など自由に自然体験ができる時間、などの話がありました。

「トライや・ワイ・ク」は主に特別活動の時間を集中的に使い、学校の授業として行われます。「セカンドスクール」も学校のカリキュラムの中で行われます。

これまでに多くの学校で、一日の体験学習や一泊二日の宿泊体験活動が行われていますが、月二回の学校五日制の今日、それだけでも時間を確保するにはかなりの工夫が必要です。にもかかわらず学校教育の中での体験学習の重要性は、ますます強く認識されてきています。したがって、十分にやろうとすれば



博物館の展示について学芸員から説明を聞く子供達

H.10.5.29 大町北小学校3学年社会見学（学校融合モデル事業）より

このような事例で、関係者自身が学社融合という用語を用いて事業を語ることはないかもしれません。「セ

カンドスクール」の場合、検討が始まつたのが八九年、その後三年間の試行期間があつたといいますから、そこにはまだ

学社融合といいう用語さえなかつたのです。大事なのは子どもの学習に対する大人の意識の持ち方や発想の仕方の転換であつて、それが学校や社会はもちろん、家庭にも求められています。

次回は、学社融合について、もう少し具体的な角度から述べてみます。そして、例えば博物館と学校が協力して授業として子どもの学習が成立する可能性などを考えるきっかけにしたいと思ひます。

(大町市教育委員会生涯学習課生涯学習係)

このように事例で、関係者自身が学社融合という用語を用いて事業を語ることはないかもしれません。「セカンドスクール」の場合、検討が始まつたのが八九年、その後三年間の試行期間があつたといいますから、そこにはまだ学社融合といいう用語さえなかつたのです。大事なのは子どもの学習に対する大人の意識の持ち方や発想の仕方の転換であつて、それが学校や社会はもちろん、家庭にも求められています。

山と博物館 第44巻 第2号

発行 平野長野県大町市大字大町八〇五六一

大町山岳博物館 一九九九年二月二十五日発行

印 刷 大糸タインズ印刷部 TEL(026) - 1321-0221

定 価 年額 一、五〇〇円(送替共)(切手不可)

郵便振替口座番号〇五四〇一七一二三五二